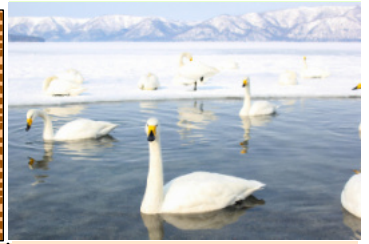


# 郷土研通信



発行：てしかが郷土研究会 北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10  
発行者：松橋 秀和

屈斜路湖に来た冬の使者  
寒さはこれから

## 第6回月例会の様子

大雪が心配された天候も何とか持ち越し、例会が開催された。

出席者（敬称省略）は、  
安藤心・山本広・小川義雄・  
小林俊夫・浦山かほ・荻原  
峻宏・松橋秀和でした。

### 会員の動き

#### 松橋秀和氏談：

前回の例会で、郷土研究会の会員が過去に町の広報誌に連載していた「むかしむかし」シリーズの文字起しをして、テーマごとに冊子状にする作業を行っていた、と報告した。

細かい修正はまだあるが、以下の作品がある程度の形にした、と報告があり成果品が披露された。

『硫黄山と鉄道百年物語』

種市佐改著

『道路と永山在兼と姉妹都市』  
種市佐改著



『阿寒国立公園小史』

小林俊夫著

『てしかが文学散歩』

山本広著

『てしかが文学散歩』

山本広著

『てしかが歴史散歩』

山本広著

『てしかが開拓醫』

長谷部徳美著

『主畜農業と小田切栄三郎』

山本広著

『てしかが歴史写真館』

齋藤敬子編

『てしかが歴史写真館』

齋藤敬子著

『てしかが歴史写真館』

松橋秀和編

#### 会員から：

会員分を冊子状にするのは大変な労力があるので、PDFデータにして配布してはいかがか？との意見があった。検討する事とします。また、条件が許せば印刷して販売して会の活動費に充てては、との意見もあつた。

#### 小林俊夫氏談：

先日（一月一三日）、弟子屈だけ震度四の地震があつた。『阿寒国立公園小史』に昭和一三年の屈斜路湖地震のことを記述してあるので、そのコピーを持ってきた。（裏面に3ページ・4ページ掲載）

そのほかにこの記述を書くにあたって、釧路市図書館から当時に新聞記事を複写していただいたのでこれも見ていただきたい。（出席会員に配布）

弟子屈だけの単発地震は八六年前の出来事である。

#### 追記：

松橋氏が「てしかが歴史写真館」に掲載した「屈斜路コタン」の言い伝え」も参考に2ページに掲載してあるので、参考にしていただきたい。

以後、例会は今回も地震の話題から色々な弟子屈の歴史に関する雑談へ展開していった。

### 勉強会

齋藤敬子さんが急用で欠席でしたので、急遽松橋氏が以前公民館講座で紹介した「原野紀行」原野の詩人更科源藏とてしかが」を話した。

更科源藏が執筆した『原野シリーズ』には、明治・大正時代の弟子屈が克明に描写されている。その著作は、弟子屈の歴史を語る上でも主要な読み物であるし、氏は欠かせない人物である。今回は、氏の生い立ちから中央詩壇から詩人として認められるまでを解説した。続きはまたの機会に。

# 次回の例会

二〇二四（令和六）年

二月二十八日（水）

午後七時からから

## ふるさと歴史館

（摩周観光文化センター内）

勉強会は、

斎藤敬子さんの

仮題「松浦武四郎ー

クッシヤロ・コタン滞在記」

です。

例会で話題になった  
「屈斜路湖」地震の  
参考資料

むかしむか史(218)

弟子屈歴史写真館ー92

平成二〇年一二月

## 屈斜路コタンの

### 言い伝え

屈斜路コタンには「屈斜

路湖には昔、大アメマスが  
住んでいて、湖を渡る舟が  
あると波を起こして覆して、  
人々を困らせていた。ある  
とき、アイヌの英雄が鉛(も  
り)を持って退治に来て、近  
くの山にくくりつけたが、  
大暴れしてくくりつけた山  
が抜け、その下敷きになっ  
た。それが中島になり、と  
きどき地震が起こるのも、  
山の下になったアメマスが  
まだ死に切れずに暴れるか  
ら：」（『アイヌ伝説集』  
更科源藏編「屈斜路湖の中  
島と大アメマスー弟子屈町  
屈斜路・弟子カムイマ老伝」  
から筆者が要約した）とい  
う、アイヌの古老が伝える  
伝説があります。

一九三八(昭和一三年)五月  
二九日、屈斜路湖底噴火大  
地震が起き、亀裂や山崩れ、  
陥没などの地殻変動が起さ  
ました。湖底からは強酸性  
の水が湧き出し、屈斜路湖  
の水が酸性化し、魚が絶滅  
に近い状態になったのです。  
この地震のことを忘れか  
けた七〇年後の二〇〇八  
(平成二〇)年一〇月、北  
海道大学大学院理学研究院

と北海道立地質研究所が  
「屈斜路活断層」といわれ  
る断層の調査を行いました。  
地層の年代やズレの大きさ  
などを詳しく測り、断層の  
過去の履歴や地層と断層の  
関係を研究するところです。  
この地域の「大アメマス」  
の言い伝えが語り継がれた  
ことは、人々の記憶に残る  
年月のうちに繰り返し地震  
が起きていたことが想像で  
きます。

（松橋秀和 述）



70年後に現れた「屈斜路活断層」  
2008年10月28日撮影



屈斜路湖底噴火大地震  
1938(昭和13)年5月29日 午前1時42分  
屈斜路円山付近

## 屈斜路コタンの言い伝え

# 阿寒国立公園小史(8)

弟子屈むかしむか史(8) てしかが郷土研究会 会員 小林 俊 夫

## 屈斜路湖の湖底地震の発生

時代的には暗いムードが漂いはじめた昭和十三年五月二十九日午前一時四十二分屈斜路を中心とする地震が発生しました。震源地は屈斜路湖の深さ二十

キロメートル地点と推定され、マグニチュード六・〇で直下型の地震でした。当時の様子を釧路新聞（昭和十三年五月三十日刊行）は次のように報じています。



釧路新聞 昭和十三年五月三十一日発行版

「阿寒国立公園の強震・湖畔を除く各温泉の湧出止まる・死者目下の処一名（見出し部分）。

二十九日午前一時四十三分頃、前夜の防空薄戸ぐつすり寝込んだ市民を大揺れの地震が襲い、二時頃まで絶えず揺りかへして恐怖に叩き込んだが、夜が明け放たれると、震源地と見られる阿寒国立公園地帯に、強震が残した魔の

爪跡は不気味な亀裂となり、或はまだ一瞬のうちに地上の面貌をぞろりと変えてさらけ出した、即ち弟子屈の温泉旅館に破損が相次ぎ、温泉も一時は湧出が止まるなどの騒ぎを煮起、更に震央地と見られている和琴半島附近は最も強烈な揺れにあり、家屋は倒壊、幼児死の惨劇もあつた、一瞬のうちに面貌を変えたのは風光明媚に謳われる和琴半島から不気味な白煙が噴き出し住民を驚かせている、鉄道の被害も南弟子屈、上札鶴間に七ヶ所の線路沈下を現出、運転不能に陥り一時はダイヤも混乱した」

る草地の至る処に無数の陥没穴が出来、熱湯が湧出し、一体は泥地となつて目も当られぬ惨状を呈し、更に和琴半島に進むと半島の咽首たる砂地（野天風呂と売店のある間）に一間四方の大陥没が数ヶ所起り沸きあがる湯と砂がこきまざつて泥湯となり湖水に流れ出す始末、更に半島の突端は地震と共に三十数メートルも水蒸気が吹きあげ半島を覆う千古の木をしのいでのぼっている、和琴美幌間の観光道路には樹木は倒れて道をふさぎ処によっては三尺から陥没した道路から地滑りして完全に道路を阻んでいる。」

直下型の地震であつたために被害も甚大であつたことがこと細かく記載され、その惨状が伝わってきます。



各現場写真は「弟子屈町史」昭和56年度版より

### 各種学術報告

北海道帝国大学（現北海道大学）理学部鈴木醇博士の報告では次のように述べています。「昭和十三年五月二十九日午前一時四十二分屈斜路地方に地震が起り、地震断層、亀裂、山崩れ、陥没、沈降等の地形変動を起し、人畜、家屋道路等に担当の被害を及ぼした。地震そのものは、比較的局部的なもの



丸山〜ヌプリオンド間の道路水平移動

であったが、従来この地方には地震がほとんどなかったもので、この地震は学術上より見ても意味深いものであった。  
種々の地変のうち、断層、亀裂、山崩れ等は美幌峠北西の古梅より弟子屈温泉に至る北西―南東の方向上に生じた。とくに著しいものは丸山、ヌプリオンド山間において、水平移動による二・四メートルの道路のくい違い、尾札部、和琴半島において地震断層により東北側三十糧

の相対的落下、丸山及びヌプリオンド山の山崩れなどである。また東北側屈斜路湖岸においては沈降、陥没がおこり、一時的に新温泉の湧出、湖水の攪乱等をみた。この地震に伴う本地域の火山地質構造線と考えられる東北―西南の方向でなく、むしろこれに直交する。北西―南東の方向に被害が出現したことは、注目すべきである。  
また、田中館秀三氏の発表した「昭和十三年屈斜路地震1」及び「昭和十三年屈斜路地震2」

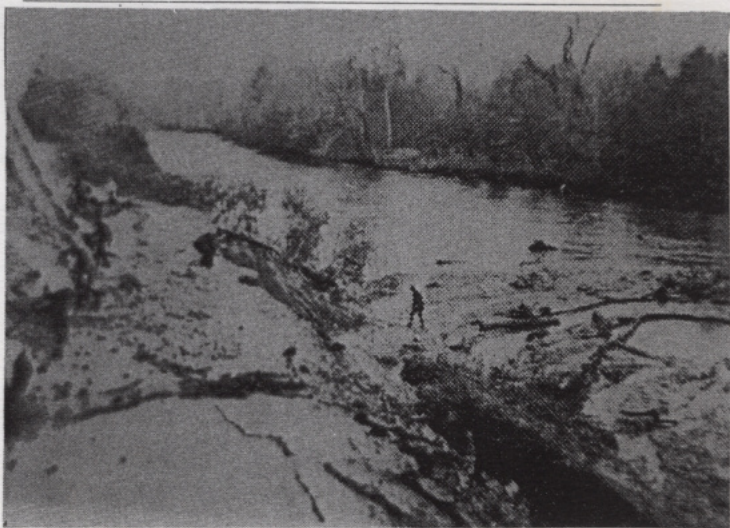
では次のよう  
にふれていま  
す。「6月1  
日より6日ま  
で現地調査を  
なし、又7月  
下旬より8月  
初旬に至りて  
主として屈斜  
路湖の調査を  
せなり。」と  
あり、地震発  
生し余震が続  
く中、3日後  
には現地調査  
に入り生々し  
い状況を専門  
家の立場で報  
告されており、  
特に興味ある

点は、その報告書の中で「湖水地震とはほぼ同時に和琴温泉附近にては約1m湖水隆起……、又ポンドの附近にても約現水位より2尺高く波は押し寄せ小舟を引き行けり、……水の差し引きは和琴半島にては朝まで続きたりと云ひ、エントコマツにては早期2〜3尺波押しよせ居たりと云う、ポンドにては朝9時まで8寸位の高さに差し引きありしと云う。」とあり、湖水津波も発生したことが報告されています。

また「昭和十三年五月二十九日屈斜路地震調査報告（昭和十三年六月二十一日地震研究所談話会発表）津屋弘達著では弟子屈村の被害状況を弟子屈村役場調として右表のように発表しています。  
この地震の発生によって屈斜路湖の水質等の変化により、多種魚群の生息地であった湖も皆無に等しい状況となりました。このように、屈斜路直下型大地震は死者を含め甚大な被害をもたらし、阿寒国立公園指定以

種別	死傷	家屋倒壊	家屋半壊	家屋破損	木炭窯	道路	橋梁	其他	計
熊牛方面				1棟 60円	3基 150円			180円	390円
弟子屈原野方面				1棟 330円	19基 549円	2千米 100円		1,170円	2,149円
仁多方面			1戸 80円		13基 1,300円			380円	1,760円
川湯方面				2棟 386円	5基 600円				986円
美留和方面					25基 2,010円	80米 600円	2ヶ所 4,300円	270円	7,180円
奥春別方面				4棟 55円	55基 4,890円			710円	5,655円
札友内方面				11棟 450円	22基 1,710円	80米 600円		250円	3,010円
屈斜路方面	小人 死1	5戸 1,600円	1戸 200円	13棟 2,247円		850米 9,250円		861円	14,158円
弟子屈方面				4棟 18,071円		2千米 100円		2,817円	20,988円
合 計	小人 死1	5戸 1,600円	2戸 280円	36棟 21,599円	142基 11,209円	5,010米 10,650円	2ヶ所 4,300円	6,638円	56,276円

備考 表中其の他とあるのは主として商店販売品の破損額なり（弟子屈村役場調）  
「昭和十三年5月29日 屈斜路地震調査報告」津屋弘達著より



ヌプリオンド山の山崩れ

来最大の危機といえます。  
前述したように時代に太平洋戦争へと向かう時期であり、防空演習の最中の地震であっただけに、あたかも大戦の予兆であるかのような最悪の出来事であり、弟子屈町史上でも最悪の悲惨な出来事の一つではなかったかと考えます。  
次号は更に大戦前後を引き続き記載します。